

## 中島敦「巡査の居る風景 ― 一九二三の一つのスケッチ ―」について

### ― 中島の朝鮮へのまなざし ―

鄭 舜瓏

#### 一、

「巡査の居る風景――一九二三の一つのスケッチ―」（以下は「巡査の居る風景」と称する）は中島敦が昭和四年六月に、一高の「校友会雑誌」で発表したものである。そのときの中島は二十歳で、東京帝大文学部国文科に入る一年間前のときであった。

周知のように、中島敦は初めて文壇にデビューした後、まもなくなくなった若い作家である。初めて文壇に出た作品集は『光と風と夢』（昭和十七年七月十五日筑摩書房より）と『南島譚』（昭和十七年十一月十五日今日の問題社より）とがあって、とちらも彼が病死した（昭和十七年十二月四日）同じ年に発表されたものである。

「巡査の居る風景」は中島死後刊行された『李陵』を含めて、彼の出版した作品集の中に収まれなかった、ただ学校の雑誌に載った作品である。にもかかわらず、この作品は彼が朝鮮を舞台に設定した数少ない作品の一つであり、彼の朝鮮経験の捉え方を理解する上で、不可欠である。

大正九年（1920年）のとき、中島は父の朝鮮の龍山中学校への転勤によって、京城龍山小学校に転学した。中島は龍山小学校五年生から京城中学校四年修了まで、七年間に朝鮮に住んでいたということである。その後、昭和二年（1927）に内地に帰り、第一高等学校に入学する。つまり、中島の十一歳から十七歳までという成長の青春期はほとんどを当時日本に占領されていた朝鮮で過ごした。内地人として植民地に行くと、文化、民族、人種、アイデンティティなどの問題を避けて暮らすことがまったく不可能と言えるが、当時まだ若い少年であった中島は彼を取り囲んでいたこれらの「風景」に対して、どのように捉えているか。また、これらの経験は彼の今後の創作の養分になったことは言うまでもないが、中島が実際に朝鮮を舞台にする作品は少ない。では、彼のほかの作品と共通した部分はあるのであろうか。

#### 二、

「巡査の居る風景」は中島のほかの早期の作品と同じように、プロットがまとまった作品ではなく、話の進み方が断片的で、出来事と出来事との間に必ずしも密接な関係を持たない。

話の主人公は趙教英という巡査で、時代はまさに、副題にあるとおり、大正十二年（1923）の冬である。この話は趙教英をめぐる、当時の朝鮮人と内地人との衝突を描きながら、趙教英の「巡査」という支配者の職務と被支配者の民族という矛盾の立場におかれる心情を語る話なのである。

以下はストーリーの出来事を列挙するという形であらすじを紹介したいと思う。

##### 1、

a. 電車の中で、日本人の女が白い朝鮮服を着ている学生らしい青年に席を譲りたいが、「ヨボ」という軽蔑的な言い方にされたから、青年は納得できなくて、あの女と争い始めた。青年は自分は「ヨボ」ではないと弁解し、「ヨボ」は差別語ということを知らない女はなぜ青年が自分の親切を理解してくれないと不平そうに言った。そのとき、教英が考えているのは「ヨボ」という差別の言い方ではなく、

何故此の青年はあんな争論をするのだ。この穏健な抗議者は何故自分が他人であることをそんなに光栄に思ふのだ。何故自分が自分であることを恥ぢねばならないのだ。

というふうに、自分の民族のアイデンティティの問題を考えたのである。

b. 彼は電車の中で、ある日、高木という日本人巡査と一緒に選挙演説を監視することを思い出した。そのとき、唯一の朝鮮人候補者が演説を始めるとたん、人ごみの中で、二十歳にもなっていないような日本若者に「黙れ、ヨボの癖に。」と蔑ろにされた。高木巡査がいきなり、その人を捕まえて、外へ出したが、その候補

者は次のように舞台上で声を高く出した。

—— 私は今、頗る遺憾な言葉を聴きました。併しながら、私は私達も又光榮ある日本人であることを飽く迄信じて居るものであります。

教英はその時、すぐこの候補者を a の青年と比べ始めた。それで、

それからもう一度日本といふ国を考へて見た。朝鮮といふ民族を考へて見た。自分といふものも考へて見た。更に、自分の職業を、それから、今底に帰らうとして居る妻と一人の子供のことを思ひ浮かべた。

と考へて、いつものように、ある「何か忘れ物をした時に人が感じる」落ち着いた状態になった。

c. 趙は電車を降りると、一人礼儀正しい男に丁寧な言葉で、総督府の住宅を聞かれた。趙は相手が高官かもしれないこの男が自分の返事に気を配って聞いている様子を見ると、心の中でくすぐられたようにうれしかったことを気がついた。

—— あの日本の紳士に丁寧な扱ひを受けたことによつて極く少しではあるけれども喜ばされて居たのだ。丁度子供が大人に少しでもまじめに相手にされると、すつかり喜んで了ふやうに、俺も今無意識の中に嬉しがつえ居たのだ……。もう先刻の青年も笑へなかつた。府会議員の候補のことも云へなかつた。—— これは我一人の問題ではない。俺達の民族は昔からこんな性質を持つやうに歴史的に訓練されて来て居るんだ。——。

2、十二月冬の街の風景、庶民の生活を描く。売春婦金東蓮の出場を描いた。

3、  
a. 内地から高等普通学校に赴任した校長先生は従順の徳についてを話しながら、内地の中学校では独立精神を説くことを思い出して、心の中でこっそりと笑った。また、学校の歴史の時間で、若い教師は遠慮がちに秀吉の朝鮮出兵の話をした。

—— かうして、秀吉は朝鮮に攻め入つたのです。  
——  
だが、児童達の間からはまるで何処か、ほかの国の

話しでもあるやうな風に鈍い反響が鸚鵡がへしに響いてくるだけなのだ。

—— さうして秀吉は朝鮮に攻め入つたのです。  
—— さうして秀吉は朝鮮に攻め入つたのです。

b. 東京から京城に帰った総督が駅の出口で用意された自動車に乗り換えたとき、人群れの中から、一人の朝鮮の青年が躍りだし、ピストルで総督を暗殺しようとするが、成功しなかった。趙は直ちにその青年を捕らえたが、

彼は少しも抵抗しなかつた。青ざめて幾分小刻みにふるふる口もちに蔑む様な微笑を浮べて彼は警官達を見た。(中略) 絶望した落着きと憐憫の嘲笑とが浮んで居るだけだつた。

すると、趙はそのとき、日頃より感じた圧迫感が二十倍ほど増やしたように、自分に問うのである。

捕はれたものは誰だ。  
捕らへたものは誰だ。

4、金東蓮は元は毛皮の商人の妻で、主人が東京へ商売に行つたが、それっきりで帰れなかつた。金は夫がもう死んだとして、身寄りがないので、売春婦になるしかないと思つた。ある日、金はある客によつて、実は東京では大震災の混乱によつて朝鮮人虐殺事件が起こつたということが教えられた。すると、その晩、金は気が狂つたやうに、通りで会う人たびに、「みんな知つてるかい？ 地震のときのことを」を聞く。最後、趙が来て彼女を掴まって、冷静にさせたが、彼女は趙に悲鳴を上げて叫んだ。

—— 何だ、お前だつて、同じ朝鮮人のくせに、お前だつて、お前だつて。

5、朝鮮人学生と日本人学生との喧嘩の事件があつて、その懲戒について、趙は課長と意見が違つて、首にされた。その後、彼は昔、革命活動に参加したことがあつた会議のシーンを思い出した。話の最後で趙はその会議を思いつつ、柱の下に横たわっている労働者たちを起こしようとした。

「お前は、お前たちは。」突然何とも知れぬ妙な感激が彼の中に湧いて来た。彼は一つ身を慄はすと、彼等のぼろの間に首をつつこんで泣き始めた。

「お前たちは、お前たちは。此の半島は……此の民族は……。」

### 三、

朝鮮はこの作品の時代背景に一体どういう状況に置かれるか。

朝鮮は1910年の日韓併合から1919年の三・一運動<sup>1</sup>まで初代総督寺内正毅と陸軍中将・明石元二郎らによって、高压な手段によって統治するいわゆる「武断政治」と呼ばれる時代である。1919年の三・一運動はとうとう失敗したが、生み出した成果は二つがある。一つは1920年三代目総督斎藤実による懐柔の「文化政治」<sup>2</sup>の政策を採るようになった。もう一つは朝鮮の文化的民族主義運動を唱える人たちは比較的、文化的な差異を強調するようになり、即時的、急進的な独立を唱える姿勢を取り下げ、非暴力的、漸進的な方式を取るようになったのである<sup>3</sup>。

この後、急進的な抗争がなかったともいえない。1925年に、最も急進的だと思われた朝鮮共産党が結成された。その後、1929年光州での学生運動もあった。このように、「巡査の居る風景」の時代背景は激烈な三・一運動が終わった数年後、全く平静とはいえないが、前の時期と比べて、このときからは比較的に穏やかな「文化政治」が始まった時代であった。

一方で、当時の主人公の趙のように、朝鮮人としての警官はどのくらいいたのであろうか。1923年の頃の統計によると、朝鮮人警官は全警官の40%を占めていた。<sup>4</sup>つまり、趙のような人物の存在は決して少数ではなかったことが分かる。当時では、植民地の警官として、その役割はなんであらうか。

警官のパトロールは村では徒歩で、町では自転車に乗って行われたが、住民全員の顔を覚えることを任務の目標としていた。警官は飽くまでことなく民衆の日常生活に眼を光らせ、怠りなく監視を続ける存在として、民衆から好感をもって迎えられられるどころか、時として非常に恐怖の存在となった。<sup>5</sup>

だから、数の点でも職務の性質の点でも巡査は植民地の人々にとって見落としてはいけない存在だったのであろう。中島は七年間朝鮮に住んでいたんだから、巡査という特異な存在に注意しなかったわけにはいかない。しかし、中島はどうして、そしてどのようにこの人間像を利用したか。

### 四、

この作品に最も大きな特徴または意味はまさに鷺只雄氏の指摘したように、「植民地の状況を支配者である日本人の側からでなく、被支配者である朝鮮人の側から描き出していることである。」<sup>6</sup>。鷺只雄氏の指摘によると、こういう「現地人」の視点は明治から昭和十年にかけて、非常に少ないということである。

中島は「巡査」を主人公に設定するのが実に非常に巧みであった。それは鷺氏の言った「現地人」という視点からは特徴であることだけでなく、「巡査」という身分と職務の特徴も注意が注がれる。植民地である朝鮮を舞台にする上で、統治階級、支配者側からの視点もあるし、日本に移住する内地人からという視点もある。また、それに対して、一般の朝鮮の庶民からの視点もあるが、中島はどうして朝鮮人の警官を選んだのか。答えは始まりのところで述べたように、「趙教英の「巡査」という支配者の職務と被支配者の民族という矛盾の立場におかれる心情を語る話」であるかもしれない。つまり、中島にとって、趙教英という矛盾な存在を通して、彼の創作の基調である〈存在の不条理〉を発揮するのは好都合だったのではないだろうか。たとえ、中島はこれを意識していなかったとしても、彼は「巡査」を主人公として取り上げるということが中島文学の底に潜んでいる「思索者」の原型の一つとみなすべきかもしれないと考えているのである。『過去帳』の三造、「わが西遊記」の悟浄、「山月記」の李徴、「弟子」の子路、「李陵」の李陵、司馬遷などはそれに当たる人物であらう。

中島はこの作品で統治階級を諷刺することや（たとえば、3のa）、下層の人民の哀痛を語ることなどに関心も示したが、それらを主なテーマにはしなかった。その代わりに、自分が選択できないという不条理な状況に置かれる人間像——「巡査」こそ彼の興味を注ぐところであらう。

にもかかわらず、それは中島は統治階級を諷刺することや周りの庶民の生活苦を見過ごしていたとも言えない。逆に、中島はこの作品で数多く民衆の生活苦を主題の周辺に配置するという点は、この作品とほかの作品との大きな違いである。天秤棒をかついで支那人、肺病やみの売卜者、膝から折れたいざりの乞食、腕をまくって注射する福美（金の友達）など短いが、確かに中島のまなざしを通して、生活に苦勞している人たちのさまざまな人物描写が現れてくるのである。

特に作中では臭味と寒さと屍骸の描写は絶えず次のイメージが現れてくる。

#### 屍骸

- ・ 敷石には凍った猫の屍骸が牡蠣の様にへばりついていた。
- ・ 道傍には捨てられた魚の鰓が赤く崩れ、日蔭の雪溜りの上には生々しい豚の頭が囓り散らされて居た。
- ・ 毎朝、数人の行き倒れが南大門の下に見出された。彼らのある者は手を伸ばして門壁の枯れ切った鳶の蔓をつかんだまま死んで居た。

#### 臭味

- ・ 支那人の阿片と蒜の匂ひ、朝鮮人の安煙草と唐辛子の交じったにほひ、
- ・ 屋内では人々は、溝から上る瓦斯の様な葎と、蒜で腐った空気を彼等の不健全な肺臓に呼吸して、辛うじて生きて居た。
- ・ 彼は煙草臭い彼等の中に身を投ずると、

#### 寒さ

- ・ 一九二三年。冬が汚く凍って居た。
- ・ 身体の中で心臓の外はみんな凍死して了って居る様な気持ちだった。
- ・ 冷たい扉を閉めた此の大きな石造建築の柱の蔭にはチゲの群がその担架を横に捨てたまま石ころのように眠って居た。

臭味と凍りと屍骸、いずれも鮮明なイメージとして民衆の生活苦をしみじみと読者に伝えるのではないか。実際に現地の街端の風景はどうなるか分からないが、中島のまなざしを通してこうふうになるのである。

一つ違ったまなざしを挙げよう。湯浅克衛は中島敦の京城中学校の同級生であった。彼は中島と同じように、京城中学校を卒業すると、東京に帰った。その後、昭和三年に湯浅は早稲田第一高等学校に入ってから、朝鮮の経験を基づく小説を書き始めた。同じ時代、空間に置かれているものの、彼らの朝鮮在住経験は全く正反対ともいえるくらいの差異が見える。南富鎮によると、湯浅が書いた作品は多く「大陸開拓」や「移民」などの国策的な内容の色彩がつよいという<sup>7</sup>。大陸開拓以前の作品、たとえば「カンナニ」も「内鮮融和」を唱えるイメージが強い<sup>8</sup>。

時間的にはやや後であるが、湯浅は昭和十一年に「市場」<sup>9</sup>というエッセイを書いた。それは彼が東京に帰ってから四年間ぶりに朝鮮に戻ってきたときの見聞で、中にはこんな一段がある。

市場は子供の頃と餘り変わつては變なかつた。ただ、印象に残つてゐる滅茶滅茶な混雑がもうないのは淋しかつた。(中略) 今が丁度春窮期に當たつてゐるのだ。奥地の農民達は穀類を食ひ潰して草の根や木の皮を食ひ荒し始めた頃である。市に出てくる氣力もないに違ひない。(中略) その上に市が寂れるもう一つの原因は、街の商店街が発展してゐることもあらう。

如何に小説とエッセイは比べられないといつても、二人の同じ朝鮮に対する視点がどのくらいの差異があるということが分かるだろう。同じ生活苦の場面を比べてみると、湯浅の描き方は中島のようなしみじみした臭味、屍骸などの描写がまったく出てこない。子供のとき、市場が混雑だという印象は湯浅の記憶に残っている。しかし、湯浅の記憶の中に残る混雑は中島が見た屍骸でも、嗅いだ臭味でもないのではないか。

#### 五、

中島敦といえば、すぐに彼の漢文調で中国物を翻案する作品が思い出されるであろう。しかし、実際にも植民地に関する作品も少なくない。たとえば、「巡査の居る風景」の外に、「虎狩」『南島譚』、『光と風と夢』などがある。それはもちろん中島自身の海外在住の経験による反芻であろう。その特殊な経験を通して、中島がどのようにそのモチーフを創作に利用し、また自分なりの特徴を表したかについて、これから彼の満州、南洋の経験も考察していきたいと思う。

小論の考察によると、「巡査の居る風景」における「巡査」という人物像は三造、悟浄、李徴、子路、李陵、司馬遷などの「思索者」の原型は「巡査」の趙にさかのぼることが出来るのではないかと考えている。つまり、恐らく中島が早くは習作の時代から、不条理な存在を考える「思索者」という造形に注意を払ったと考えている。それによって、彼の独特な植民地小説が出来上がるわけである。

この作品のもう一つの特徴は、彼が生活の周りにあふれた民衆の生活苦の様子を避けることなく、鮮明に描き出した部分である。中島の親友の三好四郎はかつ

て中島についてこのように語っていた。

当時の私ときては『資本論』ばかりを読んでいて、文学などには全然関心を持っていなかったのですが、却ってそれが中島さんにとっては気楽な相手と思われたのでしょうか。しかし、私自身はともにヒューマンニズムの点で共通するものがあったためと思っています。<sup>10</sup>

中島は三好が言ったヒューマンニズムの性格によって、このような殖民された人の内心の葛藤を想像し、理解しようとする小説を書いたのかもしれない。彼の描写の中に、点々と現れてきた不条理な状況に置かれた数々の被支配者の姿はまだ若い少年であった彼に人間の残酷、不条理な姿を示した。このように考えてみると、彼は後、書いた『過去帳』や『わが西遊記』のなかで人間の存在に対する思考を飽くことなくテーマにしたのは、この時期の影響も見過ぎてはいけないのではないかと思う。

#### 注

1. 当時はウィルソン大統領が民族自決を呼び起こしている時代であった。また、高圧統治による反感の累積や国王高宗の死は日本人に暗殺されたと流されている噂などの原因を含めて、民衆の抑えられていた感情はほぼ限界に達するともいえる状態であった。そのとき、国王高宗の国葬を契機に、おのおの朝鮮独立を唱える団体と民衆などほぼ五十万を超えた人たちは 1919 年三・一から数ヶ月間にわたる示威行動を行った。この事件は日本側の武装弾圧によって失敗した。
2. この時期の政策といえば、憲兵隊を普通の警察制度に変わり、有る程度の集会・言論に対する制限が緩められ、極めて一部のところで選挙で議員を選ぶことが出来るなどがあった。
3. 三・一運動の生み出した結果について、筆者はマーク・ビ

ーティーの見方を参考にするのである。(マーク・ビーティー著 浅野豊美訳 (1995)『植民地 — 帝国 50 年の興亡』読売新聞社 )

4. 杉本幹雄 (1997)『データから見た日本統治下の台湾・朝鮮・ブラジル・フィリピン』龍溪書舎 p.49 ちなみに、警察部長に次ぐ警視に登用された朝鮮人は警官より半分くらい減って 22%くらい居て、部長に当たる朝鮮人は一人も居なかったという。
5. 同 3 p.177
6. 鷺只雄 (1990)『中島敦論 — 「狼疾」の方法』有精堂 p.65
7. 湯浅克衛 (2000)『日本植民地文学精選集 012 鴨緑江』南富鎮 (ナムブジン) 解説 ゆまに書房 p.2
8. 安野一之 (1995)「中島敦と湯浅克衛 — 二人の同時代 —」国学院大学大学院紀要 — 文学研究科 — 第 28 輯 p.218
9. 湯浅克衛 (2002)『文化人の見た近代アジア 3 半島の朝』ゆまに書房 PP.153~163
10. 中島敦 (2002)『中島敦全集 別巻』筑摩書房 p.254

#### テキスト

中島敦 (1979)『中島敦全集 第二巻』筑摩書房

#### 参考文献

- 中島敦 (1979)『中島敦全集』第一巻～第三巻 筑摩書房  
勝又浩・木村一信編 (1992)『昭和作家のクロノトポス 中島敦』双文出版社  
鷺只雄 (1990)『中島敦論 — 「狼疾」の方法』有精堂  
中島敦 (2002)『中島敦全集 別巻』筑摩書房  
湯浅克衛 (2000)『日本植民地文学精選集 012 鴨緑江』南富鎮 (ナムブジン) 解説 ゆまに書房  
湯浅克衛 (2002)『文化人の見た近代アジア 3 半島の朝』ゆまに書房  
安野一之 (1995)「中島敦と湯浅克衛 — 二人の同時代 —」国学院大学大学院紀要 — 文学研究科 — 第 28 輯  
マーク・ビーティー著 浅野豊美訳 (1996)『植民地 — 帝国 50 年の興亡』読売新聞社  
杉本幹雄 (1997)『データから見た日本統治下の台湾・朝鮮・ブラジル・フィリピン』龍溪書舎

てい しゅんろう/台湾大學大学院 修士課程 2 年  
loto7186@hotmail.com